

向老期世代における“地域への愛着”測定尺度の開発

サカイ タイチ オオモリ ジュンコ タカハシ カズコ ミツモリ ヤスコ コバヤシ マアサ
 酒井 太一* 大森 純子^{2*} 高橋 和子^{3*} 三森 寧子^{4*} 小林 真朝^{4*}
 オノワカナコ ミヤザキ トシエ アンザイ ヒトミ サイトウ ミカ
 小野若菜子^{4*} 宮崎 紀枝^{5*} 安齋ひとみ^{6*} 齋藤 美華^{2*}

目的 向老期世代における新たな社会関係の醸成と保健事業での活用を目指し、“地域への愛着”を測定するための尺度を開発することを目的とした。

方法 “地域への愛着”の概念を明らかにした先行研究に基づき合計30項目を“地域への愛着”の尺度案とした。対象は東京近郊に位置するA県B市の住民とし住民基本台帳データより、50～69歳の地域住民から居住エリア・年代・男女比に基づき1,000人を多段階無作為抽出し、無記名自記式質問用紙を郵送にて配布・回収した。収集されたデータを用いて尺度の計量心理学的検討を行った。

結果 583人から有効回答が得られた（有効回答率58.3%）。項目分析では項目の削除はなかった。次いで因子分析を行い、因子負荷量が0.40未満の2項目、複数の因子にまたがって0.40以上であった3項目、因子間相関が0.04～0.16と低くかつ項目数が2項目と少なかった因子に含まれる2項目の計7項目を削除し4因子構造23項目を採用し尺度項目とした。各因子は“生きるための活力の源”、“人とのつながりを大切に思う思い”、“自分らしくいられるところ”、“住民であることの誇り”と命名した。

“地域への愛着”尺度全体のCronbachの α 係数は $\alpha=0.95$ であり内的整合性が確認された。既存のソーシャル・サポートを測定する尺度と相関をみたところ統計学的に有意な相関があり（ $P<0.001$ ）基準関連妥当性も確認された。また、共分散構造分析による適合度指標も十分な値を示した。

結論 開発した尺度は“地域への愛着”を測定する尺度として信頼性・妥当性を有すると考えられた。

Key words : 地域への愛着, 尺度開発, 向老期

日本公衆衛生雑誌 2016; 63(11): 664-674. doi:10.11236/jph.63.11_664

I 緒 言

2012年に厚生労働省は地域保健を取り巻く状況変化に対応すべく「地域保健対策推進に関する基本的な指針について」の一部改正を行った¹⁾。おもな改正点の中には地域住民の自助および共助の推進が筆頭に挙げられ、地域に根ざした信頼や社会規範、ネットワークといった社会関係資本（以下、ソーシャルキャピタル）を活用した支援の必要性について指

摘している。さらに、2015年には同省から自治体宛事務連絡「地域におけるソーシャルキャピタルの活用等について」と共に地域保健従事者が用いるためのソーシャルキャピタル醸成・活用に係る手引きも示されており²⁾、地域保健従事者は今後ますますソーシャルキャピタルを踏まえた業務遂行が強く期待されているといえる。

カワチら³⁾は、「近隣のソーシャルキャピタルが個人や健康アウトカムに影響を及ぼすプロセスに関する概念モデル」において、個人レベルの健康行動と健康のリスクファクター、健康状況とソーシャルキャピタルとがつながりをもっており、それらのつながりに“近隣への愛着”が関連していることを示している。また、ソーシャルキャピタルには、「ソーシャルサポート」, 「ソーシャルリバレッジ (Social leverage)」, 「インフォーマルな社会統制 (Informal

* 順天堂大学保健看護学部

2* 東北大学大学院医学系研究科

3* 宮城大学看護学部

4* 聖路加国際大学看護学部

5* 佐久大学看護学部

6* 目白大学看護学部

責任著者連絡先：〒411-8787 静岡県三島市大宮町3-7-33 順天堂大学保健看護学部 酒井太一

social control)」、「近隣への参加 (Neighborhood organization participation)」の4つの形態があるとされ、それぞれが地域住民にとってさまざまな目的や方法で利用されるリソースをもたらしとしている。ただし、それぞれの形態のソーシャルキャピタルへのアクセスや結びつきは個々の地域住民によって異なるため、地域住民の“近隣への愛着”や地域住民が近隣のネットワークにどの程度組み込まれているかを検討することが必要であると指摘している。したがって、これらをいかに把握し、実際の業務遂行における具体策に結びつけることができるかが今後重要になると考える。

地域住民が居住している地域あるいは近隣への愛着を量的に把握するための尺度作成は、複数の先行研究において行われている。まず、複数の因子と下位項目から構成される尺度としては、田中ら⁴⁾が地域社会に対する地域住民の態度を典型的に把握することを目的に2因子10項目の尺度を作成している。また、槇野ら⁵⁾は地域に関する情報提供が居住地への愛着形成に与える影響を評価するために4因子10項目の尺度を作成している。次に、尺度ではないものの少数の項目からこれを把握しようとしたものとしては、引地ら⁶⁾が地域に対する愛着形成の心理過程を検討するために5項目の設問を作成している。また、萩原ら⁷⁾は地域住民の交通機関の利用状況が地域への愛着に与える影響を明らかにするために5項目の設問を作成している。ただし、これら既存の尺度およびその項目はいくつかの課題がある。具体的には、尺度項目案の作成にあたって用いられた概念や理論、項目の選定過程についての記述が不明瞭であること^{5,7)}や、尺度項目の表現が限定的(例:「町内会の世話をしてくれと頼まれたら引き受けても良いと思う」)である⁴⁾こと、尺度項目の文中に“愛着”という語が含まれた直接的な表現になってしまっている(例:「今住んでいる地域に誇りとか愛着のようなものを感じている」、「地域に対して愛着がある」)こと^{4,6,7)}などが挙げられる。さらに、地域住民が居住している地域あるいは近隣への愛着について、居住地への“愛着”⁵⁾あるいは“地域愛着”⁷⁾という語が用いられているが、これら用語の定義は明確に述べられていない。唯一、“地域に対する愛着”という語が「人々と特定の地域との間の情緒的な絆や繋がり」と定義されている⁶⁾のみである。

一方、本研究班の先行研究⁸⁾では“地域への愛着”の概念のコンセンサスが得られていないという状況を鑑み、その概念構造を明らかにした上で、“地域への愛着”を「日常生活圏における他者との共有経

験によって形成され、社会的状況との相互作用を通じて変化する地域に対する支持的意識であり、地域の未来を志向する心構えである」と明確に定義している。そこで、本研究では大森ら⁹⁾が明らかにした“地域への愛着”の概念に基づき、向老期世代における新たな社会関係の醸成と保健事業での活用を目指し、測定尺度を開発することを目的とした。なお、この尺度は、一般的に就労から地域への生活に移行し始める向老期世代(50~69歳)を対象とした健康増進プログラムを開発するための評価ツールとして活用することを目指したため、調査対象を居住エリアや性別の偏りがないように配慮した50~69歳の地域住民とした。なお、具体的な活用方法としては、まず、本研究で明らかにする“地域への愛着”の構成概念を健康増進プログラムの基本骨子として位置づけ、プログラムの設計に役立てることができるかと考える。これにより、プログラムの参加者がこれらの構成概念を会得または強化できるようにする。さらに、作成した尺度は評価ツールとしてこのプログラムの前後において参加者に用い、プログラムの効果を検討することができる。また、プログラムのブラッシュアップにも活用することを目指している。

II 研究方法

1. 調査対象

東京都近郊に位置するA県B市と聖路加看護大学(現聖路加国際大学)間において共同実践研究事業を締結後、同市の住民基本台帳データより、50~69歳の全住民から居住エリア・年代・男女比に基づき1,000人を多段階無作為抽出した。B市は都心から約30キロメートルの距離に位置する。台地の地質と地形を生かし、果実を特産物とする農村地域であったが、1970年代末に都心をつなぐ利便性の高い鉄道が開通したことに伴い新興住宅地として大規模開発が始まり、急激に人口が増加した。現在もその開発は続いており、自然の豊かさと都市の利便性が共存した地域特性を持っている。2015年現在の人口は約6万3000人で、高齢化率は約20%である。

2. 調査方法

対象者に自記式質問紙を送付し、同封した返信用封筒にて発送後2週間を期限として回収した。

3. 調査期間

2013年2月

4. 調査項目

調査項目は、対象者の基本属性、“地域への愛着”尺度案とした。対象者の基本属性は、年齢、性別、居住形態、居住年数、職業の有無、最近一年以内の

地域活動へ参加の有無，治療中の疾患の有無を尋ねた。

“地域への愛着”に関する調査項目は，“地域への愛着”の概念を明らかにした先行研究⁸⁾に基づき，“地域への愛着”の特性に関する5つの構成概念「生きるための活力源」，「自分の存在基盤となる安堵感」，「周囲との一体感覚」，「周囲を大切に思う気持ち」，「終わりのない周囲への愛情」について公衆衛生看護等の実務や研究において十分な経験と知識を有する共同研究者と共に構成概念ごとにアイテムプールを作成した。その後，それらについて共同研究者と妥当性の検討を重ね，1つの構成概念につき6つの項目に絞り込み，合計30項目を“地域への愛着”の尺度案とした。なお，尺度案の項目は4件法のリッカート尺度で尋ねた。

基準関連妥当性（併存的妥当性）を見るための外的基準としては，岩佐らが開発した「日本語版ソーシャル・サポート尺度」⁹⁾の下位項目である「大切な人のサポート」（4項目），“友人のサポート”（4項目）とした。「日本語版ソーシャル・サポート尺度」は，Zimet GDらが開発した「ソーシャル・サポート尺度」（Multidimensional Scale of Perceived Social Support）の日本語版で，信頼性ならびに妥当性を備え，中高年者におけるソーシャル・サポート尺度として有用であることが確認されている。ソーシャル・サポート尺度を外的基準としたのは，“地域への愛着”はそれを構成する，地域に対する支持的意識や，地域の未来を志向する心構えは，周囲の人々との関係性の認識や交流が生きるための活力や存在基盤となる安堵感といった，生活の質や地域社会における安寧やQOLと結びつくこととされる⁸⁾ため，ソーシャル・サポート的な要素を内包していることが推測されたためである。

5. 分析方法

尺度案の回答については，“そう思う”を4点，“ややそう思う”を3点，“あまりそう思わない”を2点，“そう思わない”を1点とし，各項目の回答数およびその分布を算出した。尺度項目の除外の検討は，まず項目分析を行った後に，因子分析を行った。

項目分析では，平均値±標準偏差，項目間相関，Item-Total Correlation Analysis（I-T分析），Good Poor Analysis（G-P分析）を行った。I-T分析では，全尺度の得点合計と各尺度の得点合計の相関係数を算出した。G-P分析では，各尺度得点の上位群25%と下位群25%の平均値の差を算出した。

因子分析では，主因子法，Promax回転による探索的因子分析を行った。因子負荷量が0.4以上を示

し，かつ複数の因子に0.4以上の負荷量を示さないことを条件とし，因子の解釈可能性を検討しながら，項目を採用した。抽出された因子は，項目内容に基づき因子名を命名した。信頼性の検討には，内的整合性の検討としてCronbachの α 係数を求めた。妥当性の検討には，日本語版ソーシャル・サポート尺度の得点および居住年数と尺度得点のPearson相関係数を算出した。

すべての平均値の差の検定には，分布に基づきMann-WhitneyのU検定を用いた。また，有意水準は5%未満とした。統計解析ソフトは，SPSS statistics 21およびAmos 22にて解析した。

6. 倫理的配慮

本研究は，事前に聖路加看護大学（現聖路加国際大学）倫理審査委員会の承認を得て行った（2012年12月27日，承認番号12-064）。質問紙は無記名で個人を特定できないように配慮した。また，研究の目的，方法，回答の自由意思の保障，研究成果の公表，データを研究外での使用をしないことを書面にて説明し，質問紙への回答をもって同意とみなした。

III 研究結果

回収数は611（回収率61.1%）であった。そのうち，性別・年齢が無回答，“地域への愛着”に関する30項目のうち10項目以上の無回答，日本語版ソーシャル・サポート尺度の「大切な人のサポート」・「友人のサポート」各4項目のうち3項目以上の無回答など，無回答項目が顕著な質問紙を除外した583を有効回答とし（有効回答率58.3%），これら进行分析に用いた。

1. 調査対象者の基本属性（表1）

年齢は，平均（±標準偏差）が60.4（±5.4）歳であった。60-64歳が最も多く187人（32.1%），次いで65歳以上が159人（27.3%）であった。性別は，男性が262人（44.9%），女性が321人（55.1%）であった。居住形態は，戸建ての持家が最も多く343人（58.8%），次いで集合住宅の持家が191人（32.8%）であった。居住年数は，平均（±標準偏差）が21.6±12.9年であった。20-29年が最も多く172人（29.5%），次いで10-19年が153人（26.2%）であった。職業は，有職者が350人（60.1%），無職者が232人（39.9%）であった。一年以内の地域活動への参加状況は，参加ありが340人（70.5%），参加なしが142人（29.5%）であった。現在治療中の疾患の有無は，あるが336人（57.6%），ないが247人（42.4%）であった。

2. 尺度案の回答の分布と項目分析（表2）

回答はそれぞれの項目について，平均（±標準偏

表1 基本属性

		N = 583	
項	目	実数	(%)
年齢 n = 583	55歳未満	111	(19.0)
	55-59歳	126	(21.6)
	60-64歳	187	(32.1)
	65歳以上	159	(27.3)
性別 n = 583	男性	262	(44.9)
	女性	321	(55.1)
居住形態 n = 581	戸建の持家	343	(58.8)
	戸建の賃貸	4	(0.7)
	集合住宅の持家	191	(32.8)
	集合住宅の賃貸	40	(6.9)
	社宅	1	(0.2)
	その他	2	(0.3)
居住年数 n = 580	10年未満	110	(18.9)
	10-19年	153	(26.2)
	20-29年	172	(29.5)
	30年以上	145	(24.9)
職業 n = 582	あり	350	(60.1)
	なし	232	(39.9)
地域活動への参加 (1年以内) n = 482	あり	340	(70.5)
	なし	142	(29.5)
治療中の疾患 n = 583	ある	336	(57.6)
	ない	247	(42.4)

差)が2.11 (±0.84) から3.60 (±0.61) の間であった。平均値±標準偏差が項目得点の最大値である4点または最小値である1点を超える場合にはそれぞれ天井効果と床効果があるものとしたところ、項目11, 16, 22, 23, 26の計5項目で天井効果がみられ、床効果がみられた項目はなかった。I-T分析では、項目22, 23を除くすべての項目で合計得点との相関係数が0.5以上であった ($P < 0.01$)。G-P分析では、すべての項目で得点の高い群の得点が有意に高く ($P < 0.01$) 問題はなかった。なお、項目22, 23を含む天井効果がみられた5項目については、いずれの項目も“地域への愛着”概念の測定上で不可欠であると判断し削除しないこととした。また、項目間相関については、項目22, 23と複数の項目間で有意な相関がみられなかったがその他の項目間においては有意な相関があった ($P < 0.05$)。

3. 探索的因子分析 (表3)

因子負荷量が0.40未満の2項目、複数の因子にまたがって0.40以上であった3項目、因子間相関が0.04~0.16と低くかつ項目数が2項目と少なかった因子に含まれる2項目の計7項目を削除した。その

結果、最終的に4因子構造23項目を採用し尺度項目とした。

4因子の寄与率は、それぞれ48.87%, 6.50%, 5.32%, 3.65%で累積寄与率は64.34%であった。第1因子の寄与率が他のそれと比較して高く、4因子間の重みは均等ではなかった。しかしながら、今後、地域住民に対して使用する際の便宜性や活用可能性を考慮して、各項目の各因子の配点は、尺度案の1~4点のままとし、それらを加算した得点を“地域への愛着”尺度得点とした。したがって、“地域への愛着”尺度得点は、最低点23点から最高点92点の範囲において示されることになる。本調査では、合計平均得点 (±標準偏差) が64.2 (±13.5) 点、最低点が23点、最高点が92点であった。

各因子は以下のように命名した。第I因子は「地域のために活動することは自分の楽しみである」、「地域の活動に参加すると元気になる」など5項目からなり“生きるための活力の源”とした。第II因子は「地域に世間話をする人がいる」、「地域に挨拶できる人がいる」など8項目からなり“人とのつながりを大切にする思い”とした。第III因子は「この地域は落ち着ける場所である」、「この地域は居心地がいい」など5項目からなり“自分らしくいられるところ”とした。第IV因子は「地域のことをもっと良くしたいと思う」、「この地域の良さを守っていききたいと思う」など5項目からなり“住民であることの誇り”とした。

4. 信頼性の検討 (表3)

内的整合性を検討するためにCronbachの α 係数を算出したところ、全体で $\alpha = 0.95$ 、第1因子“生きるための活力の源”で $\alpha = 0.91$ 、第2因子“人とのつながりを大切にする思い”で $\alpha = 0.91$ 、第3因子“自分らしくいられるところ”で $\alpha = 0.88$ 、第4因子“住民であることの誇り”で $\alpha = 0.89$ であった。これら4つの因子の因子間相関では、相関係数が0.55~0.70でやや高い正の相関を示した。

5. 妥当性の検討 (表4)

基準関連妥当性の検討のために、“地域への愛着”尺度23項目の合計得点および下位尺度得点と日本語版ソーシャル・サポート尺度の相関係数を算出した。その結果、合計得点と第II因子得点ともに、日本語版ソーシャル・サポート尺度の大切な人のサポート・友人のサポートの下位尺度得点で強い相関 ($r = 0.41 \sim 0.50$) がみられた ($P < 0.001$)。また、第I・III・IV因子相関では、有意なやや弱い相関 ($r = 0.29 \sim 0.39$) がみられた ($P < 0.001$)。

6. 基本属性との関連 (表4, 表5)

“地域への愛着”尺度23項目の合計得点および下

表2 地域への愛着尺度項目と回答状況, 項目分析

N = 583

項目番号	項目	各項目の分布: 実数 (%)				項目分析		
		そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	平均値± 標準偏差	I-T 分析	GP分析の 平均値の差
1	地域の人と交流すると元気になれる	54(9.3)	181(31.0)	238(40.8)	107(18.4)	2.69±0.88	0.70	1.49
2	地域の活動に参加すると元気になれる	62(10.6)	204(35.0)	228(39.1)	85(14.6)	2.58±0.87	0.68	1.47
3	地域の中に自分の生きがいがある	136(23.3)	285(48.9)	116(19.9)	41(7.0)	2.11±0.84	0.66	1.37
4	地域の自然や環境から元気をもらえる	48(8.2)	125(21.4)	262(44.9)	148(25.4)	2.87±0.89	0.62	1.33
5	地域の人との交流は生きていく上でのエネルギーになる	69(11.8)	253(43.4)	205(35.2)	54(9.3)	2.42±0.82	0.70	1.41
6	地域のために活動することは自分の楽しみである	93(16.0)	267(45.8)	172(29.5)	47(8.1)	2.30±0.83	0.69	1.40
7	この地域には大切な思い出がある	120(20.6)	175(30.0)	189(32.4)	95(16.3)	2.45±1.00	0.69	1.82
8	この地域は落ち着ける場所である	33(5.7)	83(14.2)	287(49.2)	177(30.4)	3.05±0.82	0.66	1.36
9	この地域は居心地が良い	29(5.0)	83(14.2)	287(49.2)	182(31.2)	3.07±0.81	0.67	1.31
10	この地域は自分にとって大切な場所である	29(5.0)	118(20.2)	237(40.7)	198(34.0)	3.04±0.86	0.75	1.63
11	この地域には自分の生活の基盤がある	19(3.3)	94(16.1)	213(36.5)	253(43.4)	3.21±0.83	0.62	1.28
12	この地域は自分を育ててくれている	78(13.4)	233(40.0)	184(31.6)	85(14.6)	2.48±0.90	0.77	1.68
13	地域の一員として周囲の人たちに受け入れてもらっている	45(7.7)	170(29.2)	273(46.8)	91(15.6)	2.71±0.82	0.72	1.50
14	地域の行事・祭事等を大切にしている	76(13.0)	218(37.4)	202(34.6)	85(14.6)	2.51±0.90	0.76	1.76
15	地域に住んでいる人たちのことがわかる	105(18.0)	273(46.8)	161(27.6)	41(7.0)	2.24±0.83	0.71	1.46
16	地域に挨拶できる人がいる	14(2.4)	41(7.0)	224(38.4)	300(51.5)	3.40±0.73	0.58	1.00
17	地域に世間話をする人がいる	79(13.6)	112(19.2)	186(31.9)	203(34.8)	2.88±1.04	0.61	1.61
18	地域の人との付き合いを大事にしている	43(7.4)	141(24.2)	229(39.3)	169(29.0)	2.90±0.91	0.74	1.66
19	同じ地域に住む人を大切に思う	21(3.6)	99(17.0)	296(50.8)	165(28.3)	3.04±0.77	0.77	1.52
20	同じ地域に住む人の存在のありがたさを感じる	36(6.2)	168(28.8)	261(44.8)	116(19.9)	2.79±0.83	0.78	1.65
21	地域に溶け込めていない人を気にかけている	90(15.4)	322(55.2)	132(22.6)	34(5.8)	2.19±0.76	0.57	1.03
22	同じ地域に住む者どうし、互いの生活に土足で入りこまないようにしている	13(2.2)	31(5.3)	201(34.5)	336(57.6)	3.48±0.70	0.21	0.32
23	地域の人たちに迷惑をかけないようにしている	9(1.5)	12(2.1)	180(30.9)	382(65.5)	3.60±0.61	0.33	0.44
24	同じ地域に住む人どうしのきずなは大切である	9(1.5)	68(11.7)	295(50.6)	210(36.0)	3.21±0.70	0.66	1.19
25	地域のことをもっと良くしたいと思う	22(3.8)	79(13.6)	321(55.1)	159(27.3)	3.06±0.75	0.67	1.23
26	この地域に長く住み続けたいと思う	35(6.0)	71(12.2)	230(39.5)	245(42.0)	3.18±0.87	0.74	1.62
27	この地域が好きである	24(4.1)	81(13.9)	251(43.1)	225(38.6)	3.17±0.82	0.76	1.54
28	地域のために頑張っていきたいと思う	36(6.2)	173(29.7)	280(48.0)	92(15.8)	2.74±0.80	0.78	1.52
29	この地域の良さを守っていきたいと思う	26(4.5)	102(17.5)	289(49.6)	161(27.6)	3.01±0.80	0.78	1.56
30	この地域の住民であることに誇りを感じる	55(9.4)	170(29.2)	246(42.2)	108(18.5)	2.70±0.88	0.77	1.65

尺度試案項目の構成概念

項目1~6: 生きるための活力源 項目7~12: 今の自分の存在基盤 項目13~18: 地域の人たちとの一体感

項目19~24: 地域の人たちを大切に思う気持ち 項目25~35: 終わりのない地域への愛情

最終的に採用された項目は、番号に下線がある項目を除く23項目

表3 地域への愛着尺度項目の因子分析の結果

N = 583

Cronbachの α 係数 Total=0.95

	因子負荷量				
	第I因子	第II因子	第III因子	第IV因子	
第I因子 (5項目) 【生きるための活力の源】 $\alpha=0.91$					
6 地域のために活動することは自分の楽しみである	0.87	-0.06	0.05	-0.03	
2 地域の活動に参加すると元気になれる	0.86	-0.05	-0.05	0.05	
1 地域の人と交流すると元気になれる	0.81	0.07	-0.06	0.00	
5 地域の人との交流は生きていく上でのエネルギーになる	0.80	-0.04	0.03	0.04	
3 地域の中に自分の生きがいがある	0.79	-0.04	0.02	0.01	
第II因子 (8項目) 【人とのつながりを大切にする思い】 $\alpha=0.91$					
17 地域に世間話をする人がいる	0.02	0.90	0.00	-0.22	
16 地域に挨拶できる人がいる	-0.26	0.86	0.08	-0.04	
18 地域の人とお付き合いを大事にしている	0.02	0.80	-0.15	0.17	
13 地域の一員として周囲の人たちに受け入れてもらっている	0.09	0.64	0.13	-0.03	
19 同じ地域に住む人を大切に思う	0.01	0.57	0.01	0.28	
20 同じ地域に住む人の存在のありがたさを感じる	0.11	0.56	0.01	0.22	
15 地域に住んでいる人たちのことがわかる	0.26	0.55	0.04	-0.05	
14 地域の行事・祭事等を大切にしている	0.25	0.40	0.03	0.18	
第III因子 (5項目) 【自分らしくいられるところ】 $\alpha=0.88$					
8 この地域は落ち着ける場所である	-0.01	-0.05	0.95	-0.05	
9 この地域は居心地が良い	0.02	-0.04	0.90	-0.06	
10 この地域は自分にとって大切な場所である	0.04	0.03	0.80	0.04	
11 この地域には自分の生活の基盤がある	-0.13	0.26	0.54	0.05	
7 この地域には大切な思い出がある	0.26	0.22	0.41	-0.07	
第IV因子 (5項目) 【住民であることの誇り】 $\alpha=0.89$					
25 地域のことをもっと良くしたいと思う	0.05	-0.05	-0.15	0.87	
29 この地域の良さを守っていききたいと思う	-0.09	-0.09	0.28	0.80	
28 地域のために頑張っていきたいと思う	0.09	-0.07	0.10	0.78	
24 同じ地域に住む人どうしのきずなは大切である	0.01	0.20	-0.17	0.68	
30 この地域の住民であることに誇りを感じる	0.05	-0.04	0.30	0.57	
因子間相関	第I因子	—	0.67	0.55	0.69
	第II因子		—	0.58	0.70
	第III因子			—	0.65
	第IV因子				—

因子分析：主因子法 プロマックス回転

因子負荷量0.4以上を太字で記載

項目は尺度修正案30項目のうち採用した23項目

位尺度得点と基本属性（居住年数、居住形態、地域活動への参加の有無）との関連について確認した。居住年数では、合計得点およびすべての下位尺度得点と居住年数において有意なやや弱い相関（ $r=0.20\sim0.35$ ）がみられた（ $P<0.001$ ）。また、居住形態では、合計得点およびすべての下位尺度得点の平均値（ \pm 標準偏差）において、持家の方が賃貸よりも有意に高い値だった（ $P<0.01$ ）。さらに、地域活動への参加の有無でも、参加が「あり」の方が「なし」よりも有意に高い値だった（ $P<0.001$ ）。

7. 確認的因子分析

共分散構造分析を行った結果、図1に示すように5%有意水準ですべて有意である推定値（標準化推定値）が得られた。適合度指標は、 $GFI=0.834$ 、 $AGFI=0.795$ 、 $CFI=0.900$ 、 $RMSEA=0.087$ であり十分な適合度を示した。因子間の係数の値は、第II因子“人とのつながりを大切にする思い”と第IV因子“住民であることの誇り”の係数が最も高く0.78、次いで、第III因子“自分らしくいられるところ”と第IV因子“住民であることの誇り”の係数が0.73、

表4 地域への愛着尺度とソーシャル・サポート尺度および居住年数の相関係数

N = 583

	全 体		第Ⅰ因子 生きるための 活力の源		第Ⅱ因子 人とのつながりを 大切にする思い		第Ⅲ因子 自分らしく いられるところ		第Ⅳ因子 住民である ことの誇り	
	相関係数	P	相関係数	P	相関係数	P	相関係数	P	相関係数	P
ソーシャル サポート尺度	0.41	<0.001	0.33	<0.001	0.42	<0.001	0.33	<0.001	0.29	<0.001
大切な人 友人	0.47	<0.001	0.39	<0.001	0.50	<0.001	0.35	<0.001	0.34	<0.001
居住年数	0.29	<0.001	0.20	<0.001	0.35	<0.001	0.21	<0.001	0.21	<0.001

表中の相関係数は Pearson 相関係数

表5 地域への愛着尺度と居住形態および地域活動への参加の関連

N = 583

		全 体		第Ⅰ因子 生きるための 活力の源		第Ⅱ因子 人とのつながりを 大切にする思い		第Ⅲ因子 自分らしく いられるところ		第Ⅳ因子 住民である ことの誇り	
		平均値 (±標準偏差)	P	平均値 (±標準偏差)	P	平均値 (±標準偏差)	P	平均値 (±標準偏差)	P	平均値 (±標準偏差)	P
居住形態	持家	65.2(±12.8)	<0.001	12.2(±3.6)	0.0010	22.9(±5.1)	<0.001	15.1(±3.4)	<0.001	15.0(±3.1)	<0.001
	賃貸	51.7(±15.5)		10.1(±3.9)		17.3(±5.8)		11.7(±4.1)		12.2(±3.9)	
地域活動への参加 (1年以内)	あり	68.0(±12.9)	<0.001	13.0(±3.6)	<0.001	24.0(±5.1)	<0.001	15.5(±3.4)	<0.001	15.5(±3.1)	<0.001
	なし	59.9(±11.1)		10.9(±3.2)		21.0(±4.5)		14.1(±3.1)		13.9(±3.3)	

Mann-Whitney の U 検定

持家：戸建の持家・集合住宅の持家の計，賃貸：戸建の賃貸・集合住宅の賃貸の計

第Ⅰ因子“生きるための活力の源”と第Ⅱ因子“人とのつながりを大切にする思い”の係数が0.72であった。

Ⅳ 考 察

1. “地域への愛着”尺度の信頼性と妥当性について

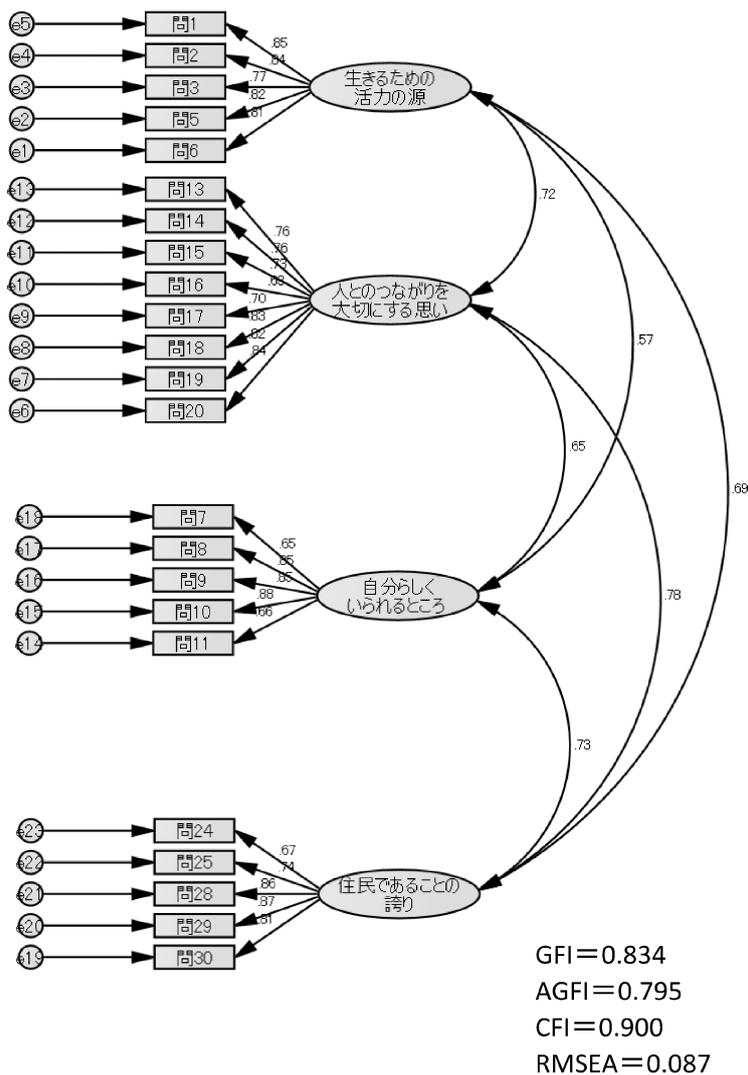
尺度の信頼性については、Cronbach の α 係数がいずれも0.8以上あり、内的整合性が確保されていることが確認された。尺度の内容妥当性についても、十分に配慮された尺度作成方法によって確保できたと考えられる。尺度案の項目は、大森ら⁸⁾が地域住民へのインタビュー調査から明らかにした“地域への愛着”の特性の5つの構成概念に基づいて作成された。このことは、他の同様の尺度において根拠となる概念や理論が不明瞭である^{5,7)}の比へ、観察された事象から導かれた概念に基づいているという点でより適切であると考えられる。さらに、尺度案の項目は公衆衛生看護等の実務や研究において十分な経験と知識を有する共同研究者と繰り返し検討をすることで作成した。彼らは、地域住民に実務を通じて接し、その“地域への愛着”の実際を経験的に熟知している。このことは、項目内容の表現が地域

住民に誤解なく理解されるという点において十分に反映されていたと考える。

また、尺度の妥当性については、因子分析により因子的妥当性の検討を行った。尺度案を構成する項目は、当初、5因子30項目にて作成したが、4因子23項目となった。ただし、最終的に採用された項目でみると、基になった5つの構成概念のうち「周囲との一体感覚」と「周囲を大切に思う気持ち」が一つに集約された形になっており、構成概念と尺度の因子はほぼ一致している。

4つの因子はそれぞれ、“生きるための活力の源”、“人とのつながりを大切にする思い”、“自分らしくいられるところ”、“住民であることの誇り”と命名した。まず、第Ⅰ因子“生きるための活力の源”は「地域のために活動することは自分の楽しみである」、「地域の活動に参加すると元気になれる」など5項目からなり、地域の活動に自ずと楽しく専心できている感覚であり、喜怒哀楽のすべてが生きていくための欠くことのできない活力源になっていること⁸⁾である。芦原ら¹⁰⁾は60歳以上の自殺率が地域への愛着がある者で有意な負の相関を示すことから、地域への愛着のような認知的ソーシャルキャピタルは抑うつと関連しており、それを介して自殺率とも

図1 確認的因子分析（標準化推定値）N = 583



関連している可能性があることを報告している。このことから、“地域への愛着”にはまさに“生きるための活力の源”であり、生きていくことの原動力や活気そのものであると考えられる。次に、第Ⅱ因子“人とのつながりを大切にする思い”は「地域に世間話をする人がいる」、「地域に挨拶できる人がいる」など8項目からなり、自分がその地域の生活に溶け込んでいる感覚や周囲を把握できている感覚であり、住民の一員として周囲の人たちを大切に思うこと⁸⁾である。渡邊¹¹⁾は、立ち話といったインフォーマルな付き合いや町内会といったフォーマルな付き合いが地域への愛着度を高めることに影響することを報告しており、これは住民にとって地域の緩やかな関係が心地よさにつながっており、それが愛着に結びついているとしている。世間話や挨拶などの日常的な行為による強すぎないつながりと、住民や地域を大切に思う価値観やそれに伴う感情が地域への愛着を醸成する。したがって、“人とのつなが

りを大切にする思い”は“地域への愛着”に欠かせないものだと考えられる。次に、第Ⅲ因子“自分らしくいられるところ”は「この地域は落ち着ける場所である」、「この地域は居心地がいい」など5項目からなり、地域に居場所を見出し、五感を通して原体験が蘇る懐かしい感覚を覚え、気持ちが落ち着く心地よさや安らかさといった安堵感⁹⁾である。一般的な語としての「愛着」の意味は、慣れ親しんだものに深く心が引かれること¹²⁾や、今まで慣れ親しんだものから離れたくないと思う心¹³⁾、人や物への思いを断ち切れないこと¹⁴⁾とされる。“地域への愛着”についても地域に対する離れがたい心情が含まれると考えられる。また、佐野¹⁵⁾は地域に危険な場所があると答えている者の割合は、地域への愛着がない群では71.3%であるのに比べ愛着がある群では53.4%と低いことから、地域の治安や安全性は“地域への愛着”形成に関連があるとしている。さらに、渡邊¹¹⁾は地域行政への満足度のうち特に福祉政

策が地域への愛着に影響しているとしている。このことから、“地域への愛着”には、地域に対して安定や安心を感じることができることも含まれていると考えられる。最後に、第Ⅳ因子“住民であることの誇り”は「地域のことをもっと良くしたいと思う」、「この地域の良さを守っていききたいと思う」など5項目からなり、その地域で生きること誇りや自分の地域を何とかしたい、もっと良くしたいという飽くなき探求心を包摂した愛情⁸⁾である。藤原ら¹⁶⁾は、都市部高齢者において子どもへの絵本の読み聞かせボランティアをした者は「地域への愛着と誇り」、健康度自己評価、握力において有意な改善または低下の抑制がみられたことを報告している。また、中田ら¹⁷⁾は保健推進員としての主体的な活動と担当地区への愛着とは関連があることも報告している。一方、鈴木ら¹⁸⁾は「地域を良くする活動は熱心な人に任せればよい」という地域への改善を他者に依存する程度を示す項目では地域愛着と負の相関を示すことを報告している。このように、地域に対する能動的な姿勢や地域の状態の向上を志向する継続姿勢が“地域への愛着”には含まれていると考えられる。以上のことから、因子分析によって明らかになった“地域への愛着”の4つの因子は、“地域への愛着”に関連した先行研究からもその妥当性が支持されると考えられる。

基準関連妥当性については、既存の日本語版ソーシャル・サポート尺度と有意な相関を得た。日本語版ソーシャル・サポート尺度は、中高年者におけるソーシャル・サポートの測定指標としての有用性が確認されている⁹⁾。結果からは、地域の愛着尺度の4つの因子のうち、特に第Ⅱ因子“人とのつながりを大切に思う思い”との相関が最も強かった。このことから、“地域への愛着”尺度はソーシャル・サポートに近似した事柄を含めて測定していることが考えられた。第Ⅱ因子“人とのつながりを大切に思う思い”の項目には、尺度案の基になった構成概念の「周囲との一体感覚」にあたるすべての項目と「周囲を大切に思う気持ち」の一部の項目が含まれている。また、“地域への愛着”尺度全体および他の因子はいずれも有意な正の相関を得た。地域において精神的・社会的な健康は、ソーシャル・サポートや“地域への愛着”が関連すると考える。したがって、これらの間で相関が確認できたことは、作成した尺度において意図された内容は測定できているといえる。

基本属性（居住年数、居住形態、地域活動への参加の有無）については、いずれも“地域への愛着”と関連が認められた。まず、居住年数については、

これが長いほど“地域への愛着”が高まることは先行研究^{11,15,18)}においても報告されている。本研究の結果でも居住年数と尺度には有意な正の相関があった。したがって、先行研究と本研究の結果は一致している。次に、住居形態については、佐野¹⁵⁾が持家か否か別に地域への愛着の有無を比べたところ、持家群において地域への愛着がある者の割合が有意に高かったと報告している。本研究の結果でも住居形態が持家である方が尺度の平均得点は有意に高かった。したがって、住居形態についても先行研究と本研究の結果は一致している。居住年数や住居形態のことについて、内閣府は平成19年版国民生活白書において、民間の借家（集合住宅）の住民は居住年数が短く近所づきあいも少ないことを報告¹⁹⁾している。このような借家の住民の行動特性が持家に比べて相対的に“地域への愛着”を低くなる一つの要因である可能性が考えられる。最後に、地域活動への参加の有無については、地域活動への参加がある者の方が“地域への愛着”が高いことが先行研究^{11,18)}において報告されている。渡邊¹¹⁾はフォーマルな付き合いである町内会活動は地域とのつながりを強くすることで愛着に影響を与えているとしている。また、鈴木ら¹⁸⁾は町内会活動や街づくり活動が愛着と正の相関を示すことを報告している。本研究の結果でも地域活動への参加がある方が尺度の平均得点は有意に高かった。したがって、地域活動への参加の有無についても先行研究と本研究の結果は一致している。以上のことから、居住年数、住居形態、地域活動への参加の有無の基本属性はこれまでの先行研究で地域への愛着を高めることが報告されてきたが、本研究で作成した新たな尺度から得た結果もこれらの先行研究と一致していることが確認された。このことは同時にこの尺度が“地域への愛着”を測定するための妥当性も有していることを示唆していると考えられる。

2. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、“地域への愛着”尺度の開発のために向老期世代を対象とした。その結果、前述の対象に対しては信頼性や妥当性のある尺度を得ることができた。ただし、向老期世代以外の世代や、性別の違い、都市部以外の居住地（地方など）においてこの尺度が問題なく使用できるか否かは現時点では不明である。特に、本研究で調査対象地域となったB市は都心に近く、鉄道の開通に伴い急激に人口が増加した新興住宅地を有しているという地域特性がある。そのため、調査対象者の平均居住年数は21.6±12.9年で比較的短かった。したがって、さらに居住年数の長い住民が多く住むような農村部や歴史的な

地域特性を持つ地域においても尺度が問題なく使用できるかについてはさらに確認する必要があると考える。以上のことから、今後は対象の幅を広げ、この尺度の汎用性を確認していくことが課題である。一方で、この尺度は先行研究によって報告されている同様の類似した尺度に比べ、尺度としての課題が少なく、有効な活用が期待される。われわれは、次のステップとして急激な高齢化などによってさまざまな健康課題が生じることが懸念される新興住宅地で“地域への愛着”を育む健康増進プログラムの構築のための評価ツールとしてこの尺度を用いることを計画している。

本研究にご協力くださいました A 県 B 市の住民の皆様にご感謝申し上げます。また、調査の実施にあたりご尽力いただいた戸田亜紀子様と三笠幸恵様に感謝申し上げます。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (B) の助成を受けて実施した。(No. 22390447)

開示すべき COI 状態にない。

(受付 2016. 2. 4)
採用 2016. 8.29)

文 献

- 厚生労働省健康局長。地域保健対策の推進に関する基本的な指針の一部改正について (通知)。健発0731第8, 2012. <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000050854.pdf> (2016年7月12日アクセス可能)。
- 厚生労働省。ソーシャルキャピタル関連資料。 <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000092042.html> (2016年7月12日アクセス可能)。
- イチロー・カワチ, S.V. スプラマニアン, ダニエル・キム, 編。ソーシャル・キャピタルと健康 [Social Capital and Health] (藤澤由和, 高尾総司, 濱野強, 監訳)。東京: 日本評論社。2008。
- 田中国男, 藤本忠明, 植村勝彦。地域社会への態度の類型化について: その尺度構成と背景要因。心理学研究 1978; 49(1): 36-43。
- 槇野光聰, 添田昌志, 大野隆造。地域に関する情報が居住地への愛着形成に与える影響。学術講演梗概集 D-1, 環境工学 I, 室内音響・音環境, 騒音・固体音, 環境振動, 光・色, 給排水・水環境, 都市設備・環境管理, 環境心理生理, 環境設計, 電磁環境 2001; 769-770。
- 引地博之, 青木俊明。地域に対する愛着形成の心理過程の検討。景観・デザイン研究講演集 2005; 1: 232-235。
- 萩原 剛, 藤井 聡。交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析。第32回土木計画学研究発表会・講演集 2005。
- 大森純子, 三森寧子, 小林真朝, 他。公衆衛生看護のための“地域への愛着”の概念分析。日本公衆衛生看護学会誌 2014; 3(1): 40-48。
- 岩佐 一, 権藤恭之, 増井幸恵, 他。日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性: 中高年者を対象とした検討。厚生指標 2007; 54(6): 26-33。
- 芦原ひとみ, 鄭 丞媛, 近藤克則, 他。自殺率と高齢者におけるソーシャル・キャピタル関連指標との関連: JAGES データを用いた地域相関分析。自殺予防と危機介入 2014; 34(1): 31-40。
- 渡邊 勉。地域に対する肯定観の規定因: 愛着度, 住みやすさ, 地域イメージに関する分析。地域ブランド研究 2006; 2: 99-130。
- 松村 明, 監修。大辞泉 (増補・新装版)。東京: 小学館。1998。
- 山田忠雄, 柴田 武, 酒井憲二, 他編。新明解国語辞典 (第六版)。東京: 三省堂。2004。
- 新村 出, 編。広辞苑 (第六版)。東京: 岩波書店。2008。
- 佐野 茂。地域への愛着と子どもへの関わりに関する一考察: JGSS-2003データより。JGSS で見た日本人の意識と行動: 日本版 General Social Surveys 研究論文集 2005; 4: 33-46。
- 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他。都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム: “REPRINTS” の1年間の歩みと短期的効果。日本公衆衛生雑誌 2006; 53(9): 702-714。
- 中田拓也, 小川玲実, 杉田友理, 他。A市における保健推進員の主体的な活動と充実感に関連する要因。北海道公衆衛生学雑誌 2013; 26(2): 67-73。
- 鈴木春菜, 藤井 聡。地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究。土木計画学研究・論文集 2008; 25(2): 357-362。
- 内閣府。平成19年版国民生活白書: つながりが築く豊かな国民生活。2007; 93. http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/10_pdf/01_honpen/ (2016年9月7日アクセス可能)。

Developing a scale to measure “attachment to the local community” in late middle aged individuals

Taichi SAKAI^{*}, Junko OMORI^{2*}, Kazuko TAKAHASHI^{3*}, Yasuko MITSUMORI^{4*}, Maasa KOBAYASHI^{4*},
Wakanako ONO^{4*}, Toshie MIYAZAKI^{5*}, Hitomi ANZAI^{6*} and Mika SAITO^{2*}

Key words : attachment to the local community, scale development, late middle-age

Objectives This study was conducted to develop a scale for measuring “attachment to the local community” for its use in health services. The scale is also intended to nurture new social relationships in late middle-aged individuals.

Methods Thirty items were initially planned to be included in the scale to measure “attachment to the local community”, according to a previous study that identified the concept. The study subjects were late middle-aged residents of City B in Prefecture A, located in Tokyo suburbs. From the basic resident register data, 1,000 individuals (local residents in the 50–69 year age group) were selected by a multi-stage random sampling technique, on the basis of their residential area, age, and sex (while maintaining the male to female ratio). An unsigned self-administered questionnaire was distributed to the subjects, and the responses were collected by postal mail. The collected data was analyzed using psychometric study of scale.

Results Valid responses were obtained from 583 subjects, and the response rate was 58.3%. In an item analysis, none of the items were rejected. In a subsequent factor analysis, 7 items were eliminated. These items included 2 items with a factor loading of <0.40 , 3 items loading on multiple factors and showing a factor loading of ≥ 0.40 , and 2 items with a low factor correlation (0.04–0.16). These items included factors that related to only these 2 items. Consequently, 23 items in the following 4-factor structure were selected as the scale items: “Source of vitality to live life,” “Intention to cherish ties with people,” “Place where one can be oneself,” and “Pride of being a resident.” Cronbach’s coefficient α for the entire scale of “attachment to the local community” was 0.95, demonstrating internal consistency. We then examined the correlation with an existing scale to measure social support; the results revealed a statistically significant correlation and confirmed criterion-related validity ($P < 0.001$). In addition, the fit indices in a covariance structure analysis showed adequate values.

Conclusions The developed scale was considered reliable and appropriate for measuring “attachment to the local community.”

^{*} Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing

^{2*} Graduate School of Medicine, Tohoku University

^{3*} Miyagi University School of Nursing

^{4*} St. Luke’s International University, College of Nursing

^{5*} Saku University, School of Nursing

^{6*} Mejiro University, Faculty of Nursing